



貝原守一医学振興財団会報

第22号

(2018年)



KAIBARA MORIKAZU MEDICAL SCIENCE PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団

会報 第22号

目 次

- 巻頭言 P 1
「貝原文庫」
天児和暢（財団理事 九州大学名誉教授）
- 平成 29 年度 研究助成金贈呈式記念写真 P 2
- 平成 29 年度 研究助成金贈呈式の挨拶 P 3
理事長 佐伯清美
- 平成 29 年度研究助成候補者の選考について P 4
選考委員・天児和暢（財団理事 九州大学名誉教授）
選考委員・仁保喜之（九州大学名誉教授）
選考委員・斉藤喬雄（福岡大学名誉教授）
- 平成 29 年度助成金贈呈者一覧 P 8
- 平成 29 年度受賞者の論文抄録 P 9
林 良憲氏（九州大学大学院 歯学研究院 口腔機能分子科学 講師）
村上 祐介氏（九州大学大学院 医学研究院 眼科学分野 助教）
前田 俊樹氏（福岡大学医学部 衛生公衆衛生学教室 助教）
池崎 裕昭氏（原土井病院総合診療科 科長）
- 貝原守一賞受賞者 P 13
松尾 眞奈氏（九州大学医学部 生命科学科 4年）
- 宮崎一郎賞受賞者 P 14
平山 謙二氏（長崎大学 熱帯医学研究所 免疫遺伝学分野 教授）
- 財団の 29 年度行事 P 16
- 貝原守一遺稿集「貝原益軒養生訓・貝原守一校註」 P 18

～ 巻頭言 ～

「貝原文庫」



財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

貝原守一氏は昭和19年にお亡くなりになるまで、九大医学部細菌学教室で研究されていた。短い在籍期間でしたが、その間に色々な本を購入され、戦後それらは纏められ、細菌学教室の図書室の奥に貝原文庫として保存されていた。改修前の細菌学教室の図書室は大変広く、20台以上の書棚に多数の本が保存されていたので、貝原先生の本の存在はあまり知られていなかった。私自身も長い間気付かなかったのであるが、定年後図書室の本を2年間ほどの時間をかけて調査し、貝原文庫の存在に気づいたのである。

60冊ほどあるそれらの本を見ると、その殆どに「貝原蔵書」という蔵書印が押してある。印は1種類ではない、「石田蔵書」「貝原蔵書」の角印と「石田蔵書」の楕円印があった（下記の印参照）。本の出版年代は1920年代から1943年で、その種類は細菌学関連ばかりでなく、生化学、植物学、原虫学など多岐にわたっていた。

1970年代に基礎B棟の改修工事がなされ、図書室も実験室に改築されたため、これらの本は、医学図書館に移転され保存されることとなった。昨年、図書館職員の方から、新たに貝原文庫という書棚を保存書庫内に設け、公開展示するようになりましとの報告をうけ、医学図書館に確認に行った。

蔵書の中で、著名な著者の本としては、BCG開発者の一人である、フランスのCarmettの著した、「Manuel Technique de Microbiologie et serologie.」細菌ウイルス（Bacteriophage）の発見者の一人である、F.D'Herelleの「Bacteriophage et son comportement」等がある。そのほかにもノーベル賞受賞者J.F.Enders（小児麻痺ウイルス発見）やK.Landsteiner（ABO血液型の発見）等の著書もある。





平成30年2月10日（於：ホテルセントラータ博多・シティホール）

平成29年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式

平成 29 年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶



一般財団法人貝原守一医学振興財団 理事長 佐伯 清美

本日、平成29年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式に、皆様には公私ご多忙のなかを御出席いただき、式を開催出来ますことは誠に有難く、篤くお礼を申し上げます。

今回、厳しい審査を経て、選ばれました受賞者の皆様、受賞誠におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

本財団は、先の太平洋戦争で年若くして戦死された、貝原守一先生を記念し、医学の研究者に研究助成金を授与し、医学の進歩発展に貢献する目的で平成3年に設立されています。

研究論文助成金授与は平成4年に始められ、本日の受賞者で104名の方が受賞されています。この多数の研究者の研究成果が、医学の進歩、発展に貢献していることを確信いたしております。

本日、研究助成を受けられる皆様、どうか助成金をご活用していただき、優れた研究成果を上げられることを期待いたしております。

今回も、厳正な審査をしていただき、受賞者を決めていただきました選考委員の先生方に篤くお礼を申し上げます。

毎年、滞りなく研究助成金授与が出来ますことは、役職皆様の力強いご助力、ご協力のお陰であり、心よりお礼申し上げます。

また、毎年研究論文を提出して下さいます各大学を始め医学研究施設の皆様にもお礼申し上げ、今後も一層のご協力をお願い申し上げます。

最後に、本日受賞の皆様を重ねてお喜びを申し上げ挨拶といたします。

平成29年度研究助成金申請の審査報告



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

平成29年度の論文審査会は、平成30年1月20日（土）午後、ホテルセントラーザ博多で開催された。昨年同様、審査は、佐伯理事長出席の下に天児、仁保、斉藤の三名の審査員で行われた。申請者数は、九州大学8名、福岡大学6名、福岡歯科大学1名、産業医科大学1名、大学以外の病院から2名の計18名で、ここ数年では最も多い申請者数であった。今回も昨年度と同様に歯科系からの申請者が多く、5名の応募があった。またここ数十年で初めて、大学以外の市内病院からの申請があった。資料は既に2ヶ月前の11月に審査員に配布されていたので、各自の審査意見をA, B, Cでの評価で報告して頂いた後に、申請順に、18名のそれぞれの申請書の詳細な検討を行った。審査員の評価が全員A級として一致した申請とAABの評価を受けた申請に関して更に議論を進め、この中から、下記の4件の申請を選出した。ほぼ2時間の審査であった。審査は申請書類に書いてある研究内容の説明を基礎として検討されるが、記載が複雑で内容が十分理解できない件もいくつか見られた。審査員はいずれも医学研究に長年従事してきた方々ではあるが、現代の最先端の研究のすべてを周知しているわけではない。自己の最先端研究を他の分野の研究者にも十分理解して貰うには、それ相応の記載を検討して頂く必要があるであろう。

記載順番は申請受理の順である。申請課題は「」内に記載してある。

林 良憲氏（九州大学歯学部 口腔機能分子科学）

「感覚神経－皮膚ネットワークの恒常性破綻に起因する痛みの慢性化機序の解明」

神経障害の器質的障害が改善されても、市販鎮痛剤が効かない痛みが長期間残る事があり、一般生活環境が著しく損なわれる。申請者は、その原因としてプロテアーゼの一種であるカテプシンが皮膚に発現することを同定し、この皮膚特異的に発現するカテプシンの発現の機構を解明し痛みの治療法の開発を目指す。

村上 悠介氏（九州大学医学研究院 眼科学分野）

「ミクログリアのゲノム酸化応答制御による新規緑内障治療薬の開発」

緑内障は網膜の神経節細胞が傷害される疾患で、酸化ストレスが原因と考えられているが、申請者等は、眼内にグアニンの酸化物特に8オキシグアニンがミクログリアに蓄積することを明らかにし、その病原的意義を解明する研究を行う。

前田 俊樹氏 (福岡大学医学部 衛生公衆衛生学)

「福岡在住の一般住民における潜在性動脈硬化の実態解明とその要因の検討」

生活習慣病の中で高血圧、糖尿病、高脂血症等は動脈硬化のリスク因子であるが、動脈硬化の進行は無症状で、潜在的な危険因子であるが、その実態を調べた報告は無い。本研究では、福岡市の市民 1000 人を対象として、潜在性動脈硬化の実態を調査し、その関連因子を明らかにする。

池崎 裕昭氏 (原土井病院 総合診療科)

「日本人高齢者に於けるフレイルティ予防を目的とした食事療法の確立」

日本は世界に先駆け高齢者社会になりつつある。高齢者が筋力の衰えなどで要介護状態になることをフレイルティと呼ぶが、その主な原因はまだ明らかではない。この研究では、老人の会などに所属する 70～90 歳の高齢者を対象として、食事摂取量、運動性などを系統的に調査し、フレイルティに陥る原因としての食事内容、食事習慣との関連を追及解明する。



平成29年度助成論文選考について



選考委員・九州大学名誉教授 仁保 喜之

今年度（平成29年度）の研究助成には、県内の研究機関から合計18名の応募が寄せられた。うち16名は大学から、あとの2名が一般病院からの応募であった。大学のみならず一般病院の勤務医からも応募があったことに敬意を表したい。

今年度の応募総数は前年度の15件、前々年度の16件に比べて増加した。いずれも優れた研究内容であり、選考は難渋したといっても過言ではない。

天児和暢九州大学名誉教授、斉藤喬雄福岡大学名誉教授、及び筆者仁保喜之の三人が審査に当たった。昨年と同じメンバーである。選考の約2ヶ月前に18名分の大量の応募書類が送られて来て、審査委員は年末年始の大部分を選考の時間に割いた。

応募研究の内容は多岐に渡っている。筆者の専門領域（内科学）から離れている研究応募も少なからず存在するので、勉強せざるを得ない。このことは筆者にとってむしろ有難い事だったと言いたい。

選考委員会は平成30年1月20日（土曜日）博多駅裏のホテルセントラザにて開催された。三人の審査委員が各意見を提出し、約1時間半を費やしてお互いに忌憚なく検討した結果、次の4人を選出することに最終決着した。例年になく、大学以外の一般病院の勤務医からも受賞者が出たことは喜ばしい。申請受理順に記載する。

『感覚神経－皮膚ネットワークの恒常性破綻に起因する痛みの慢性化機序の解明』という研究テーマを提出した林良憲氏（九州大学大学院歯学研究院口腔機能分子科学講師）、『ミクログリアのゲノム酸化応答制御による新規緑内障治療薬の開発』というテーマを提出した村上裕介氏（九州大学大学院医学研究院眼科学分野助教）、『福岡在住の一般住民における潜在性動脈硬化の実態解明とその要因の検討』という研究を計画した前田俊樹氏（福岡大学医学部衛生公衆衛生学教室助教）、『日本人高齢者におけるフレイルティ予防を目的とした食事療法の確立』という研究テーマを提案した池崎裕昭氏（原土井病院総合診療科医師）である。

以上、各受賞者の提案はいずれも計画、実行法が秀でているのみならず、各々過去の研究業績も充実していて、今後益々の研究発展が期待される。

4名の方々は、受賞を機に医科学の基礎研究の充実や医療実践の更なる進化を目指して、一層の努力を継続されるよう願って止まない。

平成29年度助成論文選考について

選考委員・福岡大学名誉教授 齊藤 喬雄



今回はこれまで以上に多数の優秀な論文が申請され、選考に苦慮致しましたが、天児和暢、仁保喜之両名誉教授と私の3名の選考委員の間に意見の隔たりがなく、4名の受賞者が決定したことを嬉しく思います。

選考に当たっては、勿論内容の優れたものを選択することが第一ですが、分野や施設に偏りがないことも考慮致しました。九州大学歯学系からは多くの優れた研究が申請されましたが、そのような事情もあり絞り込むのが困難でした。そのなかにおいて、林良憲氏の痛みに関する研究は、歯科領域だけではなく医療全般における重要な課題を扱っております。業績が優れているとともに今後の発展も期待できるので、受賞には選考委員一同異論がありませんでした。

緑内障は、最近頻度が増加しておりますが、高血圧や糖尿病など生命予後に関わりのある疾患に併発しやすいことも注目されており、治療法の開発が重要な課題です。九州大学眼科学村上祐介氏の研究は、緑内障のメカニズムを解明するとともに、治療法の開発を目的としており、実績、発展性とも受賞に値するものと思われまます。

福岡大学衛生学前田俊樹氏の動脈硬化の要因を探る疫学的研究は、福岡市民を対象にした大規模な疫学調査です。九州大学では久山町研究として世界的に知られる疫学研究が行われてきましたが、今回は福岡という大都市における研究であり、久山町研究とは異なった側面からの成果が大いに期待されます。

現在、高齢者の増加とともに、その機能低下に関してサルコペニアやフレイルという概念が広く用いられるようになり、その対策は喫緊の課題です。原土井病院の池崎裕昭氏の研究は、高齢者の栄養状態からこの課題を検討し、食事療法を確立することを主眼にしております。大学での実績をもとに、病院での実践的な研究による成果を期待したいと思います。

今回の選考では、基礎、臨床および疫学など広い範囲に及ぶ研究が採択されました。これは、貝原守一財団研究助成金の意義に叶うものと思われまますが、今回の選考に漏れても、受賞の可能性のある研究が少なくありません。そのような研究については、来年以降も是非申請にチャレンジしていただきたいと思います。また、今回は多くの申請があったものの、申請施設に少し偏りがあるように見受けられます。福岡県における研究のレベルアップを図るために、多方面からの申請を期待しております。

平成29年度 研究助成金授与者

(順不同・敬称略)

授与者名	所属機関	研究内容
林 良憲 (ハヤシ ヨシノリ)	九州大学大学院 歯学研究院 口腔機能分子科学 講師	感覚神経－皮膚ネットワークの 恒常性破綻に起因する痛みの 慢性化機序の解明
村上 祐介 (ムラカミ ユウスケ)	九州大学大学院 医学研究院 眼科学分野 助教	ミクログリアのゲノム酸化応答 制御による新規緑内障治療薬の 開発
前田 俊樹 (マエダ トシキ)	福岡大学医学部 衛生公衆衛生学教室 助教	福岡在住の一般住民における 潜在性動脈硬化の実態解明と その要因の検討
池崎 裕昭 (イケザキ ヒロアキ)	原土井病院総合診療科 科長 (九州大学病院総合診療科)	日本人高齢者に於けるフレイル ティ予防を目的とした食事療法 の確立

※平成30年度の募集について

平成30年度の研究助成論文募集は6月中旬に各大学及び関係機関宛てに応募要項、申請申込書をお送りしております。

また、当財団のホームページにも掲載し、資料をダウンロードできますのでご利用ください。



【祝賀会の模様】

【前田俊樹氏授与の様様】



平成 29 年度研究助成金受賞者

感覚神経-皮膚ネットワークの恒常性破綻に起因する痛みの慢性化機序の解明



九州大学大学院 歯学研究院 口腔機能分子科学
講師 林 良憲

痛みはあらゆる生物が保有する防御反応の一つであるが、長期的に続く痛みは著しく不快なものとして認識される。そのため、不必要な痛みを適切に除去することは患者のQOLの観点から非常に重要である。慢性的な痛みの代表例として神経障害性疼痛が挙げられる。これは器質的な障害が改善した後も、軽く触れるだけで激しい痛みを呈する疾患である。多くの鎮痛薬が上市されている一方でモルヒネなどのオピオイドですら効果が乏しいのが現状である。他の問題点として、治療に伴う予期せぬ副作用の事例である。効果的で安全な治療を行うためには、これまでになく新たな標的および薬剤の投与方法が必要であると考えられる。

これまで、我々は中枢神経系のミクログリアを標的とした慢性痛のメカニズムの解明に取り組んできた。痛みは末梢感作から中枢感作へと移行することで慢性化するとして広く認識されているため、中枢神経系の解析を行うことは非常に合理的であった。しかし、投薬を考慮すると注射あるいは内服という手段のために、全身性の副作用の問題点を克服できない思い至り、薬剤の局所投与が可能な末梢組織へと標的を移そうと試みた。これは、既存の「痛み慢性化」の概念に逆行するものであるために非常に挑戦的なものであったが、障害された神経が投射する皮膚で、痛みの慢性期特異的に因子A（未発表）が誘導されること、誘導された因子Aをノックダウンすると慢性的な痛みを治療できることなど、これまでになく皮膚での痛み制御機構を見出すことができた。

そこで本研究では、障害された神経とこれが投射する皮膚の相互作用を基軸として、因子Aが誘導されるメカニズムの解明を目的とする。本研究は、薬剤の局所投与を可能とする新たな末梢性鎮痛薬の創出のための基盤となると考えられる。

ミクログリアのゲノム酸化応答制御による新規緑内障治療薬の開発



九州大学大学院 医学研究院 眼科学分野
助教 村上 祐介

緑内障は、網膜と脳をつなぐ視神経が徐々に障害される病気で、我が国の失明原因の第1位である。緑内障に対する現在の治療法は、眼圧を下降させる点眼薬や手術のみで、日本人の8割を占める正常眼圧緑内障の治療成績を改善するためには、眼圧下降に捉われない新しい治療法の確立が急務である。

酸化ストレスは、緑内障を含む様々な神経変性疾患に関わっているが、活性酸素がどのようなメカニズム（仕組み）で神経細胞を障害するかは十分に解明されていない。我々は、活性酸素の標的として遺伝子の構成単位である核酸に着目して研究を進めており、これまでに 1) 遺伝性に網膜変性を生じるマウスや網膜変性患者の眼内に核酸の酸化体(8-オキシグアニン: 8-oxoG)の蓄積が起こっていること、2) ミクログリア（網膜内の炎症細胞）への8-oxoG蓄積が網膜炎と神経細胞死を増悪させること、3) そのメカニズムとして8-oxoGに誤対合したアデニンを切り出すMUTYH（アデニンDNAグリコシラーゼ）が、ゲノムDNAの一本鎖切断（SSB）を形成し、ポリADP-ribose-ポリメラーゼ（PARP）を活性化させることを明らかとした。本経路の活性化は、脳の変性モデル動物でも確認されており、神経変性疾患に共通の治療標的となる可能性がある。

そこで本研究では、これまでの網膜変性や脳変性の研究成果を基盤として、新たに緑内障における8-oxoGのゲノム蓄積の意義について、特にミクログリアに着目して研究を進める。本研究結果からミクログリアのゲノム酸化損傷を標的とした、全く新しい緑内障治療薬開発を目指す。

福岡在住の一般住民における潜在性動脈硬化の実態解明とその要因の検討



福岡大学 医学部 衛生公衆衛生学
助教 前田 俊樹

日本では高齢人口の増加により生活習慣病の有病率が増加しつつある。生活習慣病は健康寿命を短縮させるのみならず、労働力の損失や国民医療費を増加させる因子でもあり、その予防と対策は喫緊の課題である。生活習慣病の中には高血圧や糖尿病、高脂血症等が含まれるがこれらは全て動脈硬化のリスク因子である。しかしながら動脈硬化の進行は無症候で、一般住民における潜在的な動脈硬化を評価した研究は多くない。本研究では、福岡市の一般住民を対象として、潜在性動脈硬化の実態を調査し、さらにその関連要因を明らかにすることを目的とする。

具体的には以下の方法を予定している。

- ①冠動脈石灰化の評価：Multidetector CT により胸腹部 CT 撮影を実施する。冠動脈石灰化および大動脈石灰化測定はトレーニングされた研究者が行い、Agatston score にて評価する。
- ②頸部超音波検査：頸動脈内膜中膜肥厚・プラークの評価も行う。評価においてはPittsburgh 大学方式にて認証された測定者が測定し、研究者が継続的に精度管理を行う。
- ③飲酒、喫煙等生活習慣を含めた問診、空腹時の血液生化学検査、尿検査、診察室血圧測定、家庭血圧測定、身体計測、12誘導心電図、携帯型活動量計による活動量測定などを行う。

本研究は5年で約1000名の調査を予定している。上記調査により得られた情報を元にデータベースを作成し潜在性動脈硬化の実態を調査する。さらに統計解析を施行し潜在性動脈硬化の関連要因を明らかにすることで、将来的に動脈硬化性疾患の予防方法の解明が期待できると考える。

日本人高齢者におけるフレイルティ予防を目的とした食事療法の確立



原土井病院 総合診療科
部長 池崎 裕昭

日本において高齢化社会が進むと共に要介護者の増加が医療経済・社会的問題となっている。要介護となる原因には脳梗塞や心筋梗塞といった疾病に伴うADL低下があるが、加齢に伴って進行するフレイルティの問題が近年注目されている。フレイルティはサルコペニア（筋量・筋力低下）を中心とした概念であり、加齢に伴う種々の機能低下、健康障害に容易に陥りやすい状態を指す。Friedらが提唱したフレイルティサイクルはサルコペニアに起因する、あるいはサルコペニアに由来する低栄養状態を重要視している。これまでに横断研究でタンパク質と野菜、果物、緑茶、コーヒーなどの抗酸化効果の高い食品を多く摂取する群でフレイルティの割合が少ないことが示されているが、因果関係については立証されていない。

本研究では非フレイルティである高齢者を対象に食事習慣、運動習慣とフレイルティ発症の相関を前向き観察研究で明らかにすることを目的としている。ベースライン調査としてFIMスコア、MMSE、CES-D、血液検査、24時間蓄尿検査に加えて食事習慣と運動習慣についての問診票調査と握力測定を行い、食事習慣は換算式による各種栄養素の一日推定摂取量の算出と、蓄尿検体の解析によって数値化・カテゴリー化を行う。フレイルティのスクリーニングおよび発症・進展についてはJ-CHS基準のフレイルティ・インデックスを用いて行い、まずは追跡期間を1年間として解析を行う。本研究結果からフレイルティの発症・進展予防、すなわち健康寿命の延伸のために従来の医学的アプローチだけではなく、食事習慣などの非医学的アプローチの役割が解明されることを期待する。

平成29年度 貝原守一賞 受賞者

貝原守一賞受賞者が下記のように決定し、授与されました。
受賞者の氏名、研究の内容は以下に記す通りです。

平成29年度受賞者名 (敬称略)

・松尾 眞奈 (まつお まな)

研究内容

『腸管出血性大腸菌 O121 用 IS printing system の開発に向けた O121 に分布する IS の網羅的検索』

様々な感染源・ルートによる腸管出血性大腸菌 (*Enterohemorrhagic Escherichia coli*, EHEC) の食中毒集団感染が我が国でも発生しており、社会的関心も高い。集団感染への迅速な対応には、その迅速な検出が必要であり、そのための初期サーベイランスには簡便で迅速な菌株識別法が必要である。当研究室では、O157 EHEC ゲノム中に多数存在する挿入配列 (Insertion Sequence, IS) IS629 の株間での多様性を利用して Multiplex PCR による O157 菌株識別システムを開発している。本システムは O157 IS-Printing kit として商品化され、サーベイランス等に広く利用されている。non-O157 EHEC においても同様のシステムは有用と考えられるが、O26 でのみ開発されている。

本研究では、主要な non-O157 EHEC の1つである O121 EHEC における IS-Printing System の開発を最終目的として、O121 における IS の多様性を解析した。まず、PCR の標的 IS 種を決定するために、当研究室で全ゲノム配列を決定した O121 株のゲノム上に存在する IS を網羅的に検索した。その結果、21 種類 (111 コピー) の IS が同定でき、IS600 と IS629 が主要な IS であることが判明した (28 コピーと 21 コピー)。これらが IS-Printing に利用可能か否かを検討するには、他の O121 菌株 (特に最近の分離株) のゲノム中での、この2つの IS の分布情報を収集する必要がある。そこで、国内で2011年から2016年に分離された85株のゲノム解析を行い、上記の全ゲノム解読株を参照配列として、各菌株のゲノム上に存在する IS600 と IS629 の挿入部位の網羅的な解析を行った。その結果、IS600 と IS629 の挿入部位には、株の遺伝系統関係のみに依存しない複雑な菌株間多様性が存在し、IS-Printing の標的として十分なバリエーションが存在することが確認できた。また、この解析を通じて、主要な O121 系統とは異なる O121 亜系統を新たに見出すことができた。

今回ドラフト配列を決定した5菌株のヒト感染例は稀であり、免疫抑制者で感染をおこした報告がほとんどである。しかし、本研究によって、ヒトに対して潜在的な病原性を有する RGM 菌株のほぼ全てに関して全ゲノム情報が公開されたことによるため、本研究結果は RGM の病態解明、疫学的解析、迅速診断法の開発等に貢献するものと期待される。

貝原守一賞について

「青藍会」は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、奥様の芳子氏 (初代理事長) が故人の遺志を継いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室より研究奨励賞をと申し出があり、青藍会員原守一賞として平成4年に発足した。

平成29年度 宮崎一郎賞 受賞者

宮崎一郎賞受賞者が下記のように決定し、授与されました。
受賞者の氏名、研究の内容は以下に記す通りです。

平成29年度受賞者名 (敬称略)

・平山 謙二 (ひらやま けんじ)

研究内容

『熱帯病制圧に向けた医薬品開発のための基礎研究』

熱帯病の制圧は、世界的な健康格差の解消に必須であり、地球温暖化や世界のグローバル化に伴う流行の拡大を防ぐためにも重要な課題である。受賞候補者は、抗マラリア薬やワクチン開発の新たな手法、住血吸虫症の診断薬、デング熱の重症化予測診断法、慢性シャーガス病の早期診断法、皮膚リーシュマニア症に対する漢方方剤の適応拡大のような、挑戦的な医薬品開発のための基礎研究を長年にわたって継続し一連の成果をあげている。

最近1-2年程度の原著・総説などのリスト

マラリア

1. Lemma MT, Ahmed AM, Elhady MT, Ngo HT, Vu TL, Sang TK, Campos-Alberto E, Sayed A, Mizukami S, Na-Bangchang K, Huy NT, **Hirayama K**, Karbwang J. Medicinal plants for in vitro antiplasmodial activities: A systematic review of literature. *Parasitol Int.* 2017 Sep 7;66(6):713-720. Review.
2. Mbanefo EC, Ahmed AM, Titouna A, Elmaraezy A, Trang NT, Phuoc Long N, Hoang Anh N, Diem Nghi T, The Hung B, Van Hieu M, Ky Anh N, Huy NT, **Hirayama K**. Association of glucose-6-phosphate dehydrogenase deficiency and malaria: a systematic review and meta-analysis. *Sci Rep.* 2017 Apr 6;7:45963.
3. High-Throughput Screening and Prediction Model Building for Novel Hemozoin Inhibitors Using Physicochemical Properties. Huy NT, Chi PL, Nagai J, Dang TN, Mbanefo EC, Ahmed AM, Long NP, Thoa LT, Hung LP, Titouna A, Kamei K, Ueda H, **Hirayama K**. *Antimicrob Agents Chemother.* 2017 Jan 24;61(2). pii: e01607-16.
4. Bao LQ, Nhi DM, Huy NT, Hamano S, **Hirayama K**. Tacrolimus prevents murine cerebral malaria. *Immunology.* 2017 Feb;150(2):155-161.

NTD (住血吸虫症、デング熱、シャーガス病、リーシュマニア症)

5. Dumre SP, Bhandari R, Shakya G, Shrestha SK, Cherif MS, Ghimire P, Klungthong C, Yoon IK, **Hirayama K**, Na-Bangchang K, Fernandez S. Dengue Virus Serotypes 1 and 2 Responsible for Major Dengue Outbreaks in Nepal: Clinical, Laboratory, and Epidemiological Features. *Am J Trop Med Hyg.* 2017 Oct; 97(4): 1062 - 1069.
6. Kamel MG, Nam NT, Han NHB, El-Shabouny AE, Makram AM, Abd-Elhay FA, Dang TN, Hieu NLT, Huong VTQ, Tung TH, **Hirayama K**, Huy NT. Post-dengue acute disseminated encephalomyelitis: A case report and meta-analysis. *PLoS Negl Trop Dis.* 2017 Jun 30;11(6):e0005715.
7. Vuong NL, Manh DH, Mai NT, Phuc le H, Luong VT, Quan VD, Thuong NV, Lan NT, Nhon CT, Mizukami S, Doan NN, Huong VT, Huy NT, **Hirayama K**. Criteria of "persistent vomiting" in the WHO 2009 warning signs for dengue case classification. *Trop Med Health.* 2016 May 16;44:14.
8. Nhi DM, Huy NT, Ohyama K, Kimura D, Lan NT, Uchida L, Thuong NV, Nhon CT, Phuc le H, Mai NT, Mizukami S, Bao LQ, Doan NN, Binh NV, Quang LC, Karbwang J, Yui K,

Morita K, Huong VT, **Hirayama K**. A Proteomic Approach Identifies Candidate Early Biomarkers to Predict Severe Dengue in Children. PLoS Negl Trop Dis. 2016 Feb 19;10(2):e0004435.

9. Ohyama K, Huy NT, Yoshimi H, Kishikawa N, Nishizawa JE, Roca Y, Revollo Guzmán RJ, Velarde FU, Kuroda N, **Hirayama K**. Proteomic profile of circulating immune complexes in chronic Chagas disease. Parasite Immunol. 2016 May 25.
10. Na-Bangchang K, Ahmed O, Hussein J, **Hirayama K**, Kongjam P, Aseffa A, Karbwang J. Exploratory, Phase II Controlled Trial of Shiunko Ointment Local Application Twice a Day for 4 Weeks in Ethiopian Patients with Localized Cutaneous Leishmaniasis. Evid Based Complement Alternat Med. 2016;2016:5984709.

宮崎一郎賞について

平成6年11月に創設され、貝原財団から九州大学医学部寄生虫学講座同門会に寄付されており、この資金から寄生虫学分野における顕著な業績を挙げた研究者に研究目的達成の為、その一助となるよう助成を行っている。

奨励賞授与の基準や方法は九州大学医学部寄生虫学講座同門会で規定が定められている。



【授賞式の模様】



【講義の模様】

財団の主な会議及び事業報告

(1) 評議員会

開催年月日	開催場所	議案
定時評議員会 平成29年 6月 3日	ホテルセントラーザ 博多 4F会議室(茜の間)	1、平成28年度事業報告の件 2、平成28年度収支決算承認の件

(2) 理事会

会議名及び開催年月日	開催場所	議案
定例理事会 平成29年 6月 3日	ホテルセントラーザ 博多 4F会議室(茜の間)	(1) 平成28年度事業報告の件 (2) 平成28年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成29年度事業計画報告の件 (4) 平成29年度収支予算報告の件 (5) 研究助成金応募要項の件
定例理事会 平成29年 9月22日	財団事務局	平成29年度の事業概況について
臨時理事会 平成29年12月15日	財団事務局	平成29年度助成事業研究論文募集結果の件
臨時理事会 平成30年 2月10日	ホテルセントラーザ 博多 地下二階会議室 (シティホール)	(1) 平成29年度研究助成金授与者名 決定の報告及び承認の件 (2) 平成30年度事業計画案承認の件 (3) 平成30年度収支予算案承認の件
定例理事会 平成30年 3月24日	財団事務局	財団事業の現況報告について

(3) 助成事業

年 月 日	行 事
平成29年 6月10日	平成29年度研究助成論文応募要領送付 産業医科大学、九州大学大学院・病院、福岡大学医学部、 福岡歯科大学、久留米大学医学部、九州がんセンター、 九州歯科大学
平成29年10月17日	貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会に 研究費70万円を助成
平成29年10月17日	宮崎一郎賞 九州大学医学部寄生虫学教室同門会に研究費 30万円を助成
平成30年 1月21日	平成29年度助成金授与論文選考委員会 (於：ホテルセントラーザ博多4階・椿の間)
平成30年 2月10日	平成29年度助成金授与式開催 (於：ホテルセントラーザ博多・シティホール) 授与者4名に助成金額各200万円・総額800万円を助成

(4) 機関誌発行

年 月 日	行 事
平成29年 7月24日	貝原守一医学振興財団会報（第21号）発行



昭和17年(1942)31歳

貝原益軒養生訓・貝原守一校註

貝原守一

経験に基いた方法にしたがつて治療をほどこして行く、といふ點に達してゐた。ただ自分の立場を主張するために、理論をなして、體系をつけるためのよりどころとした理論において、種々の立場に分れてゐたところを、いいてあらわす。しかし、著者の真摯な努力にもかかわらず、そのころの醫學に根本的なよりどころとなる基礎醫學的な知識が乏しかったために、結局は情緒におもむくよもほかない状態となつてゐた。

益軒先生の養生訓のなかにあらはれる、解剖、生理、病理的な考へにもこの關係はみとめられる。また益軒先生自身、より積極的に根本的なものの追求に努力してゐる點はみとめられないようである。その上養生訓のなかに現在の醫學的知識からみれば、誤つた、または不適當な理論的記述の部分もかなりある。それにもかかわらず、養生訓を一言して流し、われわれに切實に感じられる眞實性は、實に益軒先生の限らなく深くゆたかな経験と、學問的態度の正しさによるといふことができる。一般に、日本の養生論の特色として、肉體的な養生のほかは、精神的な養生に主眼を置くこと

が見られるのであるが、益軒先生の場合は精神の養生といつても、決して觀念的であらなく、つねに人間の、しかも社會的な、または國家的な人間の活動に即して、肉體的なものの上に立つ精神の養生であることは、養生訓を一讀すればさうからであらう。この點にも益軒先生の養生訓のすばれた特色があり、また、大経緯の思想と一致するものが見出され、現代においても、なを不朽の價値をもつわけがあるのである。

益軒先生の生涯は、ヨーロッパの十七世紀のはじめから十八世紀のごく初期に相當してゐる。このころのヨーロッパ醫學の狀態は二・三のすばれた醫者はあつたが、まだ山部醫者の時代で、養生訓ほどの、事實上即した科學的な養生書はあつた。この時代の代表的な傑出した醫者として、益軒先生とはほとんど同じ年代のトマス・シヤムがある。彼はヒポクラテス的醫學への復歸をうけてゐた醫者として、わが國醫學家の礎がある。彼はその當時の科學知識を教へてゐたのであるが、醫學においてはその當時の科學知識を教へてゐたのであるが、醫學においては診察および治療における態度と方法を、理論的な學說からひきはなして考へ

た。この點に彼の醫學が、そのころの機械論的な、しかも觀念化された物理學的醫學、または化學的醫學よりも、一層即事的實際的であることが認められ、いろいろの點で益軒先生の態度との相似性が認められる。しかし、このころになると、ヨーロッパでは解剖學、生理學など基礎醫學的な研究の成果が次第につぎつぎにあらはれはじめてゐり、また物理、化學の進歩は近代的な性格を示しはじめてゐるのであつて、わが國では逆にこのころから次第に基礎醫學的研究の困難と、その理論展開の貴因が加へてはじめてゐたのにくらべて、全く反對の現象を呈してゐる。ここに有能な日本の科學者が、徳川時代の末期まで、次第に活動を制限されて行く過程の一断面がある。養生訓を讀む場合にも、この點を充分留意しなければならぬのではないかと感ず

正徳三年はじめて出版された養生訓は、八巻四冊からなつてゐる。初刷は家發行された部数は非常な數にのぼつたとみえて、正徳三年版でも刷りのわるいものが多く、刷りがはつきりした本をみつけることはなかなか困難なところである。現在では正徳三年版が養生訓の原本となつてゐるわけであるが、すでにそのなかに、かなりあいまいな刷字や、傍訓などがあり、文化四年の補刷版にしても同様で、明治以後刊行されたもののうち、信頼できる西田氏の益軒十訓、益軒全集、國民文庫刊行會の貝原益軒集、有朋堂文庫、いづれも本などの養生訓をみても、みな同じような點についての誤記、原本のよみ誤りがそのまゝ見すべされてゐる。

このようなわけで、養生訓の校訂は必要な仕事だつたわけであるが、私がそれを試みることにならうとは、全く豫期しないことだつた。實さういふ、校訂などこのことこの方面の専門の方もはかにはある筈であつて、専門家がひの者がやるべきものでもないと思ふたのだつたが、櫻井匡氏のすすめもあり、これまでのものにくらべて、一箇所でも新しく校訂するところができたならば、とも考へてここに校訂をこころみることとした。

貝原守一先生が昭和18年に校註し発刊した「貝原益軒養生訓」を原文のまま複写して掲載します。

貝原守一医学振興財団
会報 第22号
2018年7月 発行

発行：一般財団法人貝原守一医学振興財団

事務局：〒811-1343 福岡県福岡市南区和田1-4-18

TEL: 092-512-8068 FAX: 092-512-8069

URL <http://www.kaibara-zaidan.or.jp>

E-Mail Info@kaibara-zaidan.or.jp